



たちもり めぐみ

日明 恩

それでも、 言官は微笑^{わら}う

講談社

日明 恩

Megumi Tachimori

それでも、
警官は微笑^{わら}う

それでも、警官は微笑^{けいかん わら}う

2002 年 6 月 20 日 第 1 刷発行

2002 年 7 月 29 日 第 2 刷発行

著 者 ^{たちもり めぐみ} 日明 恩

装 幀 坂川栄治

発 行 者 野間佐和子

発 行 所 株式会社講談社

東京都文京区音羽 2-12-21 〒 112-8001

電話 編集部 03-5395-3506

販売部 03-5395-5817

業務部 03-5395-3615

印刷所 株式会社精興社

製本所 黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©MEGUMI TACHIMORI 2002, Printed in Japan

落丁本、乱丁本は小社書籍業務部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは

文芸図書第三出版部宛にお願いいたします。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での

例外を除き、禁じられています。

ISBN4-06-211213-2

N. D. C., 913 425P 20 cm

それでも、警官は微笑う 目次

第一章

寄付 よりつき

7

第二章

迎付 むかえつけ

69

第三章

席入 せきいり

97

第四章

初座 しよざ

154

第五章

中立 なかだち

262

第六章

後入 ごいり

300

第七章

後座 ござ

357

第八章

退席 たいせき

381

それでも、警官は微笑う

装丁◎坂川事務所

カバーイラストレーション◎服部有美子

第一章 寄付 よりつき

1

たけもとまさみ
武本正純はため息をついた。そして盛夏だというのにカウンスターの上に置かれている、おでんの保温器の隣に手をつき、背を向けて自分を待つ男に一步、近づいた。

もとはと言えばこの男が悪いのだ。探し求めている銃をミチオが持っているらしいという情報をもとに、穩便に職務質問をしようとしたただけだ。なのにこの男が邪魔をした。お蔭でこの有様だ。お前のせいだと怒鳴りつけてやりたいのを、なんとかこらえる。今はそんな状況ではない。噛みしめた奥歯がぎりつと嫌な音を立てた。

調理パンの陳列棚の前に立つ石島道雄^{いしじまみちお}、通称ミチオに視線を戻す。石島はただ立っているのではなく、コンビニエンス・ストアの店員を羽交い締めにして、その頭に銃を突きつけていた。はたして何発弾があるのだろうか。透けて見えるはずもないが、諦めきれずに武本は銃を凝視した。

「もっと尻を突き出すんだよ！」

石島が叫ぶ。興奮しきった、裏返って甲高い声だった。

すでに命じられたとおり、ズボンと下着を脱ぎ落とし、下半身を丸出しにしていた男は、ぎこち

なくさらに尻を突き出した。

そんな格好をしていれば、とうぜん見えるものが見える。あまりに無防備で滑稽なその格好に、同性であるがゆえに醜悪さより情けなさを感じ、武本は再びため息をついた。

しげしげと男を眺める。茶色のジャケットの襟に伸びた髪が掛かっている。体格は中背で細身。眼鏡あり。職業も年齢も、今ひとつ見えてこない。武本はその男の顔を思い出そうとしていた。

夜八時を過ぎればほぼ毎日、北池袋のホテル街の路地をうろついているはずの石島を武本が見つけたのは、二丁目外れのタイ料理屋の前だった。声を掛けようと近づこうとしたそのとき、脇道からこの男が飛び出してきた。男は石島に向かって「逃げろ、警察だ!」と、叫んだのだ。

男の声に弾かれるように走り出した石島を、武本はすぐに追った。道端に立っていた外国人女性達が、自分らを検挙に来たと思いこんだらしく、右に左に逃げまどう。錯綜する女達にぶつからないように避けながら、武本は石島を追いかけた。

虫が夜の灯りに集まるように、石島は煌々^{くわうくわう}と光を放っているコンビニエンス・ストアに飛び込んだ。そして入り口近くにある棚のパンを並び替えていた店員に飛びかかると、その頭に隠し持っていた銃を突きつけたのだ。

——やはり銃を持っていたか。

最悪の展開になってしまった。武本は舌打ちした。しかしとまどっている余裕はない。とにかく石島を説得しようと口を開き掛けたそのとき、コンビニエンス・ストアの自動ドアが軽い音を立てて開いた。入ってきたのは、さっき石島に叫んだ男だった。

男は入ってくるなり、「止めなさい」と上がった息で、しかし落ち着いた穏やかな声で石島に話

しかけていた。

あつけにとられてしまった武本を押しのとけると、男はさらに一步、石島に近寄った。

「く、来るんじゃないっ！」

後ずさりした石島が背後の棚にぶつかった。棚からパンが床に落ちて、ビニールの乾いた音が響いた。銃をつかんだ石島の腕がわなわなと震えている。

「おい、お前！」

鋭く呼びかけた武本に、男は振り向きもせずにこう言い返した。

「点数稼ぎでやたらめったら引っぱろうとするから、こんなことになるんだ。それより、早く店内の客の安全を確保したらどうだ？」

前半部分には同意しかねたが、後半部分は悔しいが、確かに男の言うとおりだった。

見回すと、まるで似合っていない細身のスーツに身を包んだ若い男が、一人は保冷庫のドアの取っ手をつかんで開け放したまま、一人は手に缶飲料を持ったまま立ちつくしていた。足下のプラスチック製の緑色の買い物かごの中は、すでにカップ麺や菓子で埋まっている。買い出しに来た風俗店の呼び込みだろう。最近池袋に居着いたらしい。武本には見覚えのない顔だった。

保冷庫のドアの取っ手をつかんでいる男が、空いている手をそつと背広の外ポケットに潜り込ませた。

「動くなっ！」

石島に怒鳴られたのはその男ではなく、レジ・カウンターの中の店員だった。

「落ち着いて下さい」

男はさつきと変わらず、静かな声で石島に話しかけていた。

「この刑事に追われて怖かったんですね。大丈夫、手出しはさせません。だから」

「うるさい、うるさい、うるさいっ！」

石島が子供のように足を踏みならした。落ちていたパンが踏みつけられて、袋の中でぐしゃりとつぶれた。

「あなたの言うとおりに何でもしますから。だから、その人を放してあげて下さい」

石島が足踏みを止めた。歪めた顔が瞬時に曇りのない笑顔に変わっていた。

「何でも言うとおりにするって？——面白え！」

興奮しきって唾を飛ばしながら、石島が男に向かって叫んだ。

石島は男に集中している、都合が良い——。武本はそう思っていた。

「よし、それならお前、そのカウンターに手を突け」

男が言われたとおりにする。

「ズボンとパンツ、脱げ」

石島が何を望んでいるのか、武本には理解できなかった。それは男も同じだったのだろう。言われたとおりに手は突いたものの、訝しげに振り向いた。

「何でもするんじゃないのかよ！」

腕の中の店員の頭に、石島が強く銃を突きつける。それを見た男は、逆らうのをやめて言われた通りにしはじめた。カチャカチャとベルトのバックルが鳴った。

武本はゆっくりと石島から保冷庫の前の二人を隠すように立ち位置を変えた。その直後思ったとおり、背後から「北池袋二丁目のハッピー・マートに強盗です」と密やかな声が聞こえてきた。

「尻を突き出せ、もっと脚を開くんぞ。へへ、それでいい。おい、キチク！」

「なんだ？」

本人としては認めてはいないが、あだ名を呼ばれて武本は応えた。

その声に驚いたのか通話を切ったらしい。背後からピツという電子音がやたらと大きく聞こえて、武本は背中を汗がつつと落ちるのを感じた。

——気づかれたか？

次の動きを読むためにも、武本は石島の顔を凝視した。石島の唇が動いた。

「この男のケツを掘れ」

気づいてはいなかった。ほっとしたのもつかの間、命じられた内容の必然性を理解出来ずに、武本は正直に思ったことを口にした。

「なんで俺がそんなことをしなくちゃならないんだ？」

「殺すぞ！」

人質の頭にぎりぎり銃を突きつけられて、そう言われては仕方ない。人の命には代えられない。武本はため息をついた。

石島の瞳孔は開き、口からよだれが垂れている。銃を持つ手が、引き金に掛かっている指が震えている。その手の甲に、無数のかさぶたがあるのに気づいた。

武本は後悔した。石島がマリファナをやっているだろうとは思っていた。だが半年前に職務質問したときには、現物を持っていなかった。だから深く追及出来なかったのだ。しかもそのときは注射痕はなかった。

だが今はある。すなわち、すでに覚醒剤に手を出しているということだ。しかも手の甲だ。他の

箇所の皮膚や血管が硬くなって注射しづらくなったからに違いない。石島はすでに常用者なのだ。こんなことなら、やはりあの時にきつちりと引つ張っておけばよかったと、武本は齒嚙みした。

「そんなことをして、何になるんだ？」

「へへ、面白えじゃねえか。ヤクザも及び腰になるキチクの兄さんが、男のケツ掘るなんてよ」

だらしなく開いた石島の口の中が覗けた。そこにも中毒者である証拠があった。隙間の空いた齒はエナメル質が溶けて、まるで小さな子供の乳齒のように小さくなっていた。

「早くしろ！ 殺すぞ、本気だぞ！」

どう見ても正気ではない。何か方法がないかと武本は考えた。思いついて口を開く。

「こいつじゃ、その氣にならない。お前ならまだしも」

石島の眼が泳いだ。

若い頃はそれなりに整った顔をしていたらしいが、今はその面影はどこにもない。不摂生な生活が一目で判る、たるんで色つやの悪い肌、瘦せた髪、濁った眼。かつて石島は新宿二丁目で男相手の売り専だった。だが金目当ての若いノンケに場所を奪われて、池袋まで流れてきたという。前回の職質のとき、逆に石島に問われて、武本が前は新宿署勤務だったと答えると、石島は懐かしそうに当時の思い出話を語ったのだ。そのときのことだ。粘り着くような視線で、「お兄さんなら、ただでもいいよ」と囁かれ、腿をねっとり撫でられた。それを武本は思い出したのだ。

本人としては不本意なのだが、その手の趣味の男達に熱い視線を送られる外見を武本は持っているらしかった。会った人の十人が十人、体育会系出身と決めつける長身でがっしりした躰に、素人が趣味で彫った木彫りの仏像のような無骨な顔。黒々とした髪はしっかりと天に向かっていて、常に短く切り揃えられていた。これは生来の剛毛のため、他の髪型にしようのない苦肉の策なのだ。

が、それがかえって彼らの人気に繋がっていたらしい。新宿署勤務時代、二丁目で発生した暴行傷害事件の捜査に加わったとき、知らない間に撮られた写真が、彼らの間でかなりの高値で出回っていたと、のちに先輩から聞かされて、武本は惘然としたものだ。

「どうせ突っ込むんなら、こいつじゃなくて、あんたの具合のいいケツにしたいもんだな」

何でもいい、石島の気をそらせれば。武本はそう考えた。

案の定、金のためよりは、もともとそういう性癖の男だけに食指が動いたらしい。石島がとりとした流し目をよこした。

武本はじりつと一步、近づいた。踏み出して腕を伸ばせば石島の腕をつかめる距離だ。うまく行くかも知れない、武本は一縷の期待を持った。

だがその期待を、聞こえてきたパトカーのサイレンの音が潰した。石島の視線が店の入り口に向けられる。

「僕じゃないですよお」

店内の皆の視線の先、自動ドアのマットの上、両手を上げて立っていた潮崎しおさきが、口をとがらせて言い返していた。

「ひどいですよお。何にも言わないで走り出しちゃうんだから。先輩はランニング・シューズなんですから、革靴の分、分が悪い僕に一声掛けてくれたっていいじゃないですか」

武本はため息をついた。それ以外、他に出来ることはなかった。

潮崎哲夫てつおが池袋署に配属され、課長命令でコンビを組まされてもう六カ月になるが、武本は未だにその言動を理解することが出来ない。潮崎は、武本にとって未知の生物も同然だった。

長身の武本より頭一つ背は低いが、すらりとした躰つき、髪は柔らかなような天然の栗色。下は幼稚園児から上は七十過ぎの老女までもが好感を持つであろう顔は、嫌みなく爽やかに整っている。そして身を包むのは、池袋署刑事課全員を合わせたよりも金の掛かってそうなオーダーメイドのスーツと革靴である。誰がどう見ても警察の人間だとは思わない、潮崎はそんな外見の男だった。状況は緊迫している。犯人は人質を取り、その頭に銃を突きつけている。さらに武本に人質の安全を守りたければ、男の尻を掘れと命じている。なのに潮崎の態度は吞気を通り越して、ふざけているとしか言いようがない。武本は状況を忘れて、もう一つさらに深いため息をつきそつになった。「くそっ！」

大きく響き渡るサイレンの音に石島は叫ぶと、店員の耳のピアスが天井を向くほど強く、頭に銃を突きつけた。

短く刈り上げた髪を金色に染めた店員は、一見強面こもこで強気に抵抗するかと思えた。だが外見とは裏腹に、ただ蒼白になって震えているだけだった。

「ミチオ、止めとけよ」武本は落ち着いた声で話しかけた。

「うるさいっ！ おい、お前！ こっちに来い」

その声にレジスター・カウンターに手をついていた男が振り向いた。

「この刑事さんのモノをしゃぶるんだよ。ほら、早くしろ！」

男の目が見開かれた。

「お前じゃ、だめだつてさ。だからその気にさせるんだ」

石島の口からはよだれが垂れつづけ、眼の焦点も定まっていない。すでに自制心がないのだ。バトカーの停まるブレーキ音に石島の手が揺れた。ほんの弾みで引き金に掛かった指に力が入っ